

## 能『清経』試論

佐々木 香織

### 序

目の前に自分の死が見えたとき、人はその死までの時間をどのように生きるだろうか。『平家物語』は、清盛という超越した個性によつて急激に隆盛した力が、東国に蜂起した源氏勢に攻め滅ぼされるといふ平家一門の栄華と滅亡とを軸に描かれているが、その合戦の約三百年後、世阿弥によつて『平家物語』に題材を取つた能の数々が作られることになる。

能『清経』<sup>(1)</sup>は『平家物語』に題材を取つた作品であり、最後の決戦を目前にしながら、戦わずして自殺する平家の武将の物語である。これは現代でも人気演目の一つであるが、それは清経の人格や行為そのものが好評を得たためではなく、むしろ彼は目前に迫る決戦の重圧に耐えかねて自殺に短絡した短慮な人物、殊に武人としては風上にも置けぬ懦弱な人物と受け止められていたようである。江戸時代には軟弱な氣風を助長するとして『清経』を上演禁止の能、いわゆるお止能とどめにする藩さえあつたほどである。

さらに、本説となつた『平家物語』における清経に関する叙述は極めて少なく<sup>(2)</sup>、『平家物語』での清経は、清盛、義仲、義経などとは比べるべくもないマイナーな存在である。

では、なぜ能『清経』は現代においても人気を保ち続けているのであろうか。それは我々が、単に有名な人物の逸話や模範とすべき優秀な人間像を求めるがゆえに能を見るのではないことを意味していると同時に、『平家物語』には存在せず、能『清経』には存在する何かに魅了されているためと考えられる。

能『清経』にあつて『平家物語』にない要素は、自殺に至る彼の心理描写と自殺に対してなされる妻の非難である。清経が武士としての低い評価に甘んじ、目立たぬ脇役の位置を保持しているのは『平家物語』中である。能『清経』中では、決戦前の自殺という行為自体に変化はないが、清経の自殺に至る心理描写が精緻に展開され、また、清経の霊と妻の邂逅という『平家物語』にない状況も設定されている。『平家物語』における彼の存在感のなさや武士としての低い評価を覆す程の魅力はこの要素にあると思われ。

一曲の能は、曲中に様々な価値が重層的・多面的に包含されていることを評価すべきであり、その能の持つある一つ価値のみで判断されるべきではないと思われる。それゆえ、能『清経』の持つ多様な価値の一つを何らかの概念語で表して分析し、それによってこの曲を解釈したとすることは、誤りではないにせよ不十分な結果しか得られないであろう。本論文では、先に挙げた「自殺者の心理と自殺という行為の非難」に焦点を絞って能『清経』の分析すること、世阿弥が『平家物語』から何を得て、それをどのように表現したか、そしてそれは何のために表現されたかを明確にしたい。この曲には、なお考察すべき多くの優れた要素が含まれていると思われるが、本論文はこの曲の解釈そのものを本義とするのではないため、それらの考察は今後の課題とし、世阿弥の表現しようとしたものに焦点を当てて考察してゆきたい。

### 能『清経』とは

まず前提となる物語を解説しておきたい。物語はワキである淡津三郎がまず舞台上に登場し、主人公である平清盛の嫡男重盛の三男である左中将清経(シテ)<sup>(4)</sup>が戦わずに入水したと清経の妻(以下、妻と略す)に告げるところから始まる。その報告を受け、妻は夫の死に対してではなく「入水自殺」という行為に驚く。そして

恨めしやせめては討たれもしは又。<sup>(5)</sup>

病の床の露とも消えなば。すこしの恨みも晴るべきに。われと身を投げ給ふこと。偽りなりける豫言かな。

げに恨みてもそのかひの。亡き世となるこそ悲しけれ。

と続けることから、生前に二人が約束を交わしていたこと、その約束が守られることへの期待がうかがわれる。<sup>(6)</sup>ここで恨みというのは、先に述べたように、夫の選んだ「入水自殺」という行為に向けられており、神や仏を恨むといった類のものではない。

この曲では、「入水自殺」の理由説明がなされる後半部に至るまでに、「恨み」という語が十三回(下掛かりでは十四回)発せられる。この「恨み」はすべて「入水自殺」というたった一つの行為に起因しているが、「入水自殺」に対して感じる妻の「恨めし」という感情にはいくつかの理由が考えられるであろう。

さりながら命を待たでわれと身を。捨てさせ給ふ御事は。偽りなりけるかねことなれば。唯恨めしう候

第一に、妻が清経に恨みを抱くのは、夫が自分との約束を破ったからである。しかも夫の死は、戦死・病死という人為の及ばぬ理由によってではなく、清経個人が「約束の反故」が帰結されることを知りながら選択したものであり、それが恨みを喚起しているのである。これには、社会生活を営むものとして約束は守るべきであるという道徳意識、あるいは秩序意識から生じる感情も含まれていると思われる。

これは中将殿の黒髪かや。見れば目も昏れ心消え。なほも思いの増さるぞや。

見るたびに 心づくしの髪なれば。

憂さにぞ返す本の社にと

手向け返して夜もすがら。涙と共に思い寝の。

夢になりとも見え給へと。

寝られぬに傾くる枕や恋を、

知らすらん枕や恋を知らすらん

第二に、妻は夫を愛するが故に恨みを抱く。募る思いを断ち切ろうと形見を突き返しながらも、夢の姿を夜通し求めるといふ一見矛盾した行動からも、亡き後も夫を愛する妻の思いがうかがえる。

さて、通常の夢幻能における幽霊達は恨みを述べるためにこの世に現れるのが常であるが、清経は「夢でもいいから逢いたい」という言葉に引かれて妻恋しさに戻つて来る。そして夫婦の不毛で悲しい口喧嘩が始まるが、折角二人が巡り逢えたというのに解り合えぬ悲しさに、清経はなぜ自分が自決という手段を選ばざるをえなかつたかを語り始める。その途中で妻が

かように申せばなほも身の。恨みににたる事なれども。

さすがにいまだ君まします。

御代の境や一門の。果てをも見ずして徒に。

御身一人を捨てし事。

誠によしなき事ならずや  
と、口を挟むのであるが、ここからは、妻が清経に恨みを抱く第三の理由として、自分の社会性を剥奪されたことが考えられる。

清経は、清盛の長男小松内府の三男であり、上に維盛、資盛の二人の兄がいる。維盛の妻は中御門新大納言成親の娘であり、資盛の愛人は建礼門院右京大夫である。だが、清経の妻には名前がない。現存する『平家物語』に清経の名さえも戦中に自決したというくらいに記述しかないのだから、妻の名が知られていないのも当然といえば当然である。兄二人の妻も名が知られているとはいっても、誰の娘であるか、どの職種であるかという出自が知られているに過ぎない。

ともかくも、清経の妻は清経を通じてのみ、武士の妻であり、中将という位にある男の妻であり、平家方の人間であるという社会性を持ち、共同体内の構成員であると認められている。さて、ここで清経が死ぬとどうなるか。妻は、死んだ左中将の妻と呼ばれることになり、個として生き続けるにしても、共同体の中で位置を失うであろう。具体的には出家を余儀なくされるか、平家が勅勘の身でなければ「一の娘」として別の人間に嫁ぎ、「一の北の方」になったことと思われる。

これまで挙げた二つの恨みは、もし女が男との約束を破った場合においても、約束を反故にされた男はこの妻と同様の感情を覚え、恨み言を言うであろうということが予想されるが、この第三の場合に限っては、約束破りの役を入れ替えることは不可能である。

もし清経が戦中で妻が自害したという知らせと遺髪を受け取った場合、彼が恨みを抱くとすれば、約束を反故にされた事に対して、そして愛する人に裏切られた事に対してであろう。

妻の死によつても、清経が平家の左中将であることに何の変わりもない。妻の自害が何らかの不名誉になることはあつても、社会性を剥奪されるとは考えられない。無論、妻に殉じて出家を余儀なくされることもないであろう。

清経を通じてしか社会性を得られない妻は、それだからこそ余計に共同体に固執せざるを得ない状況に置かれているといえる。それゆえ、妻の言動には平家という共同体意識が色濃く反映される一面もあると考えられ、この二人の口争いは単なる夫婦喧嘩という側面だけではなく、個と共同体との対峙という面もあると考えられる。妻は自分との約束を破つた不実をなじる以外に、共同体規範から離脱した人間としての清経に非難を浴びせるのである。

佐成謙太郎氏は『謡曲大巻』<sup>(5)</sup>の中で「恨みに似たる事なれども」を「…自分勝手な恨みではございませう」と訳している。しかしここでは、小学館『謡曲集』<sup>(6)</sup>のように「…私の恨み言のようになるけれども」と捉えたい。約束を破つた事に対する恨みにかこつけて、また文句を言うようだが、この恨み言は私事ではない、と言っているのである。

つまり、自分達が所属する共同体の中では、天皇に殉じるべきこと、共同体の崩壊までは共同体のためにすべてを捧げ尽くすべきこと、一人勝手なことはすべきではないことを説いているのである。以上のようにこの「恨み」という語は、この曲中では彼らにとつての道德的規範や秩序意識が侵害されたときに発せられていると考えられる。

さて、清経は妻の非難を受けつつ柳ヶ浦での出来事を説明しようとする。落ち延びた身ながらも宇佐八幡への参詣・祈念も怠らなかつたにもかかわらず、彼の耳には平家の復権などいくら折つても無駄だという御神託が聞こえる。これが清経入水の最大の理由である。

神に見放されたことに愕然とする中、折りもおり、源氏が攻めよせてきたという報がもたらされる。取る物もとりあえず海へ逃げ出すがどこへ行くあてもなく、秋風がおこす波や、浜の松に群がっている白鷺を見ては源氏の白旗と間違えて肝を潰し、憔悴しきつた清経は深く内省する。もはや平家に神の加護はない。いくら戦つたところで無駄なのだ。そう思いこんだ彼は、感極まつてこう嘆息する。

あぢきなや。とても消ゆべき露の身を

この言葉は、直接的には、流浪を余儀なくされた平家と自らの運命に対して吐いたものである。神にも見捨てられ、源氏の影に怯えながらも、生きることには汲々としている自分自身に対して向けられたものといつてもよい。だが、恐らくは人間が遍く与えられた、死すべきことを知りながら、なお生きなければならぬ運命に対して吐露されたものであるとも思われる。

やがては死ぬ命を生き延びて、いつまでも浮き草の如く波間を漂っているくらいならば、いつそ今ここで死んでしまおうと彼は決意する。

来し方行く末をかがみて終にはいつかあだ波の。

かへらぬは古とまらぬは心づくしよ。

この世とても旅ぞかし。あら思ひ残さずやと。

シテはここで、ワキ座にいるツレ(妻)に向かつて妻に心をかけて舞う。所詮人は徒波のように消える身であり、この世は行きずりの旅だと語って聞かせるのである。この「あら」でシテは妻への思いを力強く振り切る型をする。つまり、ここで人との間わりを完全に断ち切るのである。

よそ目にはひたふる狂人と人や見るらん。

よし人は何ともみるめをかりの夜の空。

共同体に属するものはその内部の規範を守ってしかるべき、と考える人々には、自分の行動が狂って見えることを彼は自覚している。だが、妻との関係さえ断ち切った後には、周囲の思惑は彼にとって無関係である。明け方に西方浄土へ沈む月に自分も連れていって欲しいと懇願し、念仏を唱えた結果が、

船よりかつばと落汐の。

底の水屑と沈み行く憂き身の果てぞ悲しき

である。クセはここで終わる。

### 強制される死の拒絶

清経は月夜の晩に入水する。だが九州に落ちてきた当初は、平家一門復興のための行為に何の迷いも持っていない。だが、宇佐八幡より降った御神託を機に彼の心情は著しく変化してゆく。源氏が攻め寄せた、木の葉が散った、白鷺か飛んだ、波が打ち寄せた。そんなことにさえいちいち動揺し、彼の心は疲弊

してゆく。そしてその結果としての

あぢきなや。とても消ゆべき露の身を

という慨嘆である。彼はここにおいて、初めて平家のために命を捧げ尽くして死んでも、一人逃げ出して人知れず死んでも、結局死ぬことに変わりはないということに気づく。

平家物語を本説とし、シテが源平の武将である能には、主の命に従って盲目的に敵を屠る戦士は登場しない。殊に世阿弥の描く源平の能では、戦いに臨む悲しみ、誇り、風趣、恋情などが中心に据えられ、戦いには相応しくない人物の戦いが描かれている。文化的洗練と引き替えに武力的には弱体化した平家一門は、本来の職能である戦士よりも貴族に近かったことは今更いうまでもない。そんな都育ちの公達が、東夷の田舎武士を相手にするのである。勝ち目のない戦を強いられる者達が、確実な死を予想して生きる時、何を礎にして生きるべきなのだろうか。そこには死ぬことを運命づけられた人間の悲しみがあるが、それはしかし、死という結果を受け止める客体の悲しみではなく、決められた死を知りつつ死に至るまで生きねばならない主体の悲しみである。

清経は、自分の確実な死を予想したとき、ただ決められた戦列に加わり平家のために戦って死ぬことに意味を見出すことが出来ない。平家のために戦うことは、妻が彼に苦言を呈したように平家内部の共同体規範である。平家の左中將として守ってしかるべき掟である。源平の能のシテ達は、笛「小枝」に、琵琶「青山」に、勅撰集の和歌に心を傾け、あるいは平家専横を

防ぎ、老武者の誇りを守り、夫の敵を討つことを本当は願っていた。だが彼らは結局それらを捨てて、滅びゆく主に殉じて戦って死ぬ。

だが、清経は平家であることが原因で死んだかもしれないが、平家のために死んだのではない。平家という共同体内で他者との関係によって強制されて死んでいく他の修羅達と異なり、清経は共同体との関係を自らが死を選ぶということによって断ち切るのである。

『平家物語』では描かれずに能『清経』に描かれたものとは、この「死を目前にした人間の生の在りよう」ではないだろうか。確かに、『平家物語』にも清経が柳ヶ浦で何を言い、何を為して死んでいったかという記述はある。だが、なぜ彼がそのようなことを言い、なぜそのようなことを為したのかという明確な説明はない。なぜ清経がこのようなことを為したかということとは、『平家物語』を聴く者の中でも、この短い記述のみで解るものだけが解っていたのであろう。それが解らないもの耳には、彼の行為は甚だ懦弱に響くか、あるいは簡単に聞き流されていたのではないかと想像される。

『平家物語』は一部構成とも三部構成ともいわれるが、善悪を超越した力の象徴である清盛が作った悪因と、その悪因の報復を受ける形で運命に殉じて滅びゆく平家、という基本的構図を持った物語である。『平家物語』が因果応報の物語だからといって、それは善人に善い報いが、悪人に悪い報いがあるという単純な話ではない。平家の公達は同じ一門とはいえ清盛とい

う他人の悪行の報いを身に受け、自己の限界に直面せざるをえなくなるのである。後半部において滅びゆく平家は、それぞれの生が総集された一個人の人格としての「平家」として捉えられており、個々人の生死はその一表現に過ぎない。その一表現に過ぎない平家公達は、それぞれが己の死を予感しながら、志向と現実との折り合いが付けられずに悩み、そして最終的には皆滅ぼされてゆくのである。

清経の描写は、長大な『平家物語』の中でも文章にすればほんの数行に過ぎない。だが世阿弥は、この短い記述から「死を目前にした人間の生の在りよう」を鋭く看取り、新たな作品として清経入水事件を描出した。世阿弥は「滅びゆく平家の一表現」に過ぎなかつた清経の死を、死を前にして葛藤する人間の物語として清経自身の物語にしたのである。

『平家物語』には描かれず能『清経』に描かれたものが、死を前にして葛藤する人間の姿だとすれば、それが『清経』の優れた要素の一つであり、その姿が描出されていることが人気演目である理由の一つということになる。では、なぜ我々はこの死を前にして葛藤する人間の物語を好むのであろうか。そのことについて、この事件を知らされた妻や我々が、清経入水事件の責任の所在がどこにあると感じているかを分析することによって、なぜ我々がこのような物語を好むのか、また死を前にして葛藤する人間の物語が意味するものとは何かということについて考察してみたい。

能の中には描かれていないが、清経が入水したという報告を妻が受けたとき、彼女が「なぜ」と思っただろうと仮定することは、必ずずれではあるまい。彼女はその動機を探ろうとし、入水という行為の結果の責任が何に帰せられるかを考え、清経の置かれていた状況や彼の性情を可能な限り突きとめようとするであろう。彼の兄弟に共通する小松家の厭世的な性格や、平家没落の運命、置かれていた惨めな境遇、また精神的懦弱さなどにその根源を求めてみる。しかし彼女は、彼の行為がこのような様々な事情によつて規定されていたと思はざるもの、それでもなお清経の行為に納得することが出来ないのではないだろうか。もし仮に、彼女が平家没落の運命にその責任を帰していたとしたら、

恨めしやせめては討たれもしは又。

病の床の露とも消えなば。すこしの恨みも晴るべきに。

という言葉は出ないはずである。彼女は没落の運命に準じて戦死や病死するならば、それは致し方ないという考え方をしているのである。また、惨めな状況や清経の性格にこの行為が起因すると考えていれば、清経が惨めな状況を語り進め、彼の懦弱さを露わにする中で、なおそれでも共同体に殉じるべきだという非難の言葉がさらに出るのではないかと思われる。

つまり、彼女が非難する理由は、彼の行為を規定した生まれつきの性状であるとか、平家滅亡の御託宣であるとか、柳ヶ浦

での絶望的状况に求められているのではない。妻は、そのような過去における条件をなかつたものとみなして判断している。つまり、入水という行為に関して、入水以前の状態の度外視を前提にしているのである。

それはすなわち、彼女が入水という行為の結果によつて生じる因果系列を全く新たに清経自身によつて始めたとみなすことを前提にしていることである。清経に対する妻の非難は、この入水自殺の原因が、彼の性格や置かれていた諸般の事情のような一切の経験的条件に関わりなく、実際とは異なる形で規定し得たし、また規定すべきだったとみなすことを根拠になされている。

端的に言えば、妻は、清経の自覚的な意志によつて自殺という行為が選ばれたことを非難しているのである。ここからは、清経がそれまでの因果を断ち切り、自らの意志の力によつて共同体の規範から逃れようとしたということが非難されるとはいかなることかを、「自律的自由」について論じたカントの文脈<sup>(8)</sup>に則して検証してみたい。

人間そのものは現象であり経験的性格を有する。清経であれ誰であれ、現象においてなされる行為はすべて経験的原因性の法則に基づいている。しかしながら、全自然の中でも他では一切現れてこないような種類の性格が人間には備わっている。それは「ベシ (Sollen)」で表現される行為に関する性格である。

我々が認識しうるのは、何が存在していたのか、何が存在するのか、何が存在するであろうか、ということだけであり、自

然の中で、何かあるものが実際に存在しているのとは異なった形で存在すべきだったということはある得ない。我々は「清経は入水すべきであるか」と問うことはできる。しかし「円周率はいくつであるべきか」と問うことはできない。この「*Sollen*」は人間の行為に向けて発するものである。

つまり人間は、一方では確かに現象的な存在でもあるが、もう一方では意志規定に関して叡知的な存在とみなされるのである。そしてそれゆえに、妻は清経の経験的な諸条件を一切度外視して彼を非難するのである。

清経入水という行為は一面では現象の経験的系列として見て取れる。清経がどのような状態にあったのか、そしてそれがどう変化したのか、その行為は何に由来していたのかということ、我々は認識することができる。そしてその行為が現象に現れた一つの結果とみなされるならば、その結果の原因を遡行してゆくことが可能である。

それに対して叡知的とみなされる理性は、時間形式においても、時間継起のいかなる条件にも従うようなものではない。もし、時間的な生起の原則によってその原因が捉えられるとするならば、それは自然という原因性であって自由という原因性ではない。「沈み果てん」という清経の決意は現象の系列の中で、つまり時系列の中で生じたことである。「あぢきなや」と思ったからこそ、「沈み果てん」と思ったのであり、なぜ「あぢきなや」と思ったかといえは宇佐八幡の御神託があったからである。この「沈み果てん」は時系列を遡行してゆくことが可能で

あり、その中の一つの結果とみなされ、自然による原因性によるものと捉えられる。

しかも、この「沈み果てん」は確かに清経の意志ではあるが、これは「*Sollen*」ではなく、「*Wollen*」に由来する意志である。

「このようなものによって生じるのは、必然的な欲する (*notwendiges Wollen*) ではなくて、常に条件付きの欲する (*bedingtes Wollen*) にすぎない (B576)」のである。

「*Wollen*」を生じさせる自然的条件がいかに多くあろうとも、これらから「*Sollen*」を生じさせることはできない。もし、宇佐八幡で平家は必ず復興するという御託宣があったとしたら、清経は「あぢきなや」と思わなかったであろうし、「あぢきなや」と思わなければ、入水を選ぶことはなかったであろう。入水という行為に至る「沈み果てん」という意志は、確かに共同体規範という他律に因ったものではないが、条件付きの意志であるということではみなされないのである。

しかも、もし感性的な動機が理性の原因性に完全に反対するようなことがあっても、やはり理性の原因性はこうあるべきであった、という見方をするのである。つまり、いかに辛い状況下にあったとしても妻との約束は果たすべきであったし、負けるに分かっていても戦うべきだったという見方をするのである。妻の非難は、清経が他の可能性も選び得たにもかかわらず、それでもなお自殺を選んだというその一点のみ掛かっているといえるであろう。様々な約束や規範を破ったということよりも、約束や規範があったにもかかわらず、それらを捨てた

清経の選択を非難しているのである。つまり、清経は入水を決意したその瞬間に、入水という行為の責任を丸ごと全部引き受けざるを得ないのであり、他の経験的条件にそれを帰すること是一切できないのである。

### 死を目前にした人間の生が示すもの

以上のように、妻の非難は、清経の選択に向けられていたといえるであろう。だが、夫がなぜそのような行為を選ばざるを得なかったかという説明を聞くことによって、妻はその態度を軟化させるのである。

長いクセが終わると曲のクライマックスであるキリという部分に入るが、このキリとクセは、妻と清経との一言ずつの応答によってつながれている。

ツレ クドキグリ

「聞くに心もくれはとり。憂き音に沈む涙の雨の。恨めしかりける契りかな

シテ 下ノ詠

「いふならく。奈落も同じ。うたかたの。あわれは誰も。

妻 変わらざりけり

妻は、哀れな夫の末期を知って涙に沈む。彼女は夫の心情に同化しはするが、あれほど繰り返された彼女の恨みはそれでもなお晴れることはない。だが彼女はもはや夫を責めることはない。そして今度は、清経と自分とをこのような関係に追いやつ

た運命に対してその恨みを転化させるのである。それはなぜであろうか。

妻が吐露する心情を聴き、最後にシテはワキ座に向き直り、直接的には妻に向けて生前も死後も果敢なきに変わりはないかと答え、地獄に堕ちた惨めな様を舞ってみせる。清経は、死を目前にした生き地獄を嫌って入水を選択するが、その先には修羅道地獄が待っていた。敵を殺したわけではなくとも、武家に生まれたものは皆等しく修羅道地獄に堕ちることがここで判明する。

この下ノ詠は、この能を演じる上で最も重視される謡であるといわれており、最後に念を押すように、世阿弥は清経に、現世も地獄も変わりなかった、人間の力で変えることの出来るものは何もなかったと言わせているのである。

清経は、妻が数多くの恨み言を言うのは彼自身が自分達の築いてきた共同体規範を侵害したためだと解っている。しかし、解つてはいてもそれを破らざるをえない状況もまたあり得る。死に至るまでの状況を説明され、妻は彼に恨み言を言わなくなった。それは自分の夫が、人間の築いた規範をも超え出るようなところで行為の選択を強いられたこと、そのような状況に陥った上は、人間の規範を超えた力に屈服せざるをえないとの諦観を持ったからではないだろうか。

この能からは、生きるも死ぬも人為のままにならない、それどころか、自己の意のままに死んだとしても、その死の在りようすら人為では推し量れないという世阿弥の認識がうかがえ

る。それは、あくまで意志によつて行為を貫こうとするカント倫理学等とは決定的に異なる点であり、世阿弥が人為では如何ともし難い力を常に意識していたことを如実に示すものである。『平家物語』を題材とした世阿弥の能には、世阿弥のこの意識が常に通底していると思われる。

能を見に来た観客は、叡知的存在として自由を志向し、積極的に運命を更改することに力を尽くせないからといって主人公を非難しない。教科書的な人間の模範像を求めて舞台を見に来るわけではないからである。興業をする側として、敢えて悪い生き様の例として清経を描き、清経を反面教師に民衆を啓蒙しようとしたわけではないであろう。誰しも死が目前に迫れば慌てふためき動揺する。それは情弱で廉恥心のない振る舞いかもしれないが、自然な反応ではある。観客は、平時ならば周囲と波風立てずに生きられたであろうにと、己の弱さと真向から向き合わねばならなくなった状況に同情するのである。

能の世界の中でも、倫理や規範が登場人物や地謡方の口を通じて語られることがあり、当時のあるべき人間像・あるべき社会像を明確ではないにせよ看取することは出来る。そして、同一の倫理の異なる表現はあつても、異なった倫理はないという和辻の叙述にあるように、倫理的普遍性を目指しながらも社会的・対人的契機に支配された経験の世界に束縛され、あくまで個別的な状況下で行為の選択を迫られるという、虚構でありながら現実的な世界が描かれている。

しかし、能が愛好され受容されてきたのは、ある倫理がその

舞台に体现されているからではなく、その倫理をも超えるものを物語を通じて、あるいは役者の舞や謡いを通じて、舞台の機構そのものを通じて実感できるためだと考えられる。能『清経』であれば、死を目前にした人間の姿を通じて人間が相互に約した倫理や規範を超える何ものかを感じるのであり、他の曲ならばまた別のものから実感できるのであると思う。世阿弥が人為では如何ともし難い力を意識していたのと同様に、彼の作品を観る観客の側にも、そのような意識が存在しているのではないだろうか。

#### 註

(1) この能は『平家物語』の逸話を本説としており、遺髪送りと都に残された妻、宇佐八幡の御神託、清経入水の話素材としている。世阿弥の著書である『世子六十以後申楽談義』中でも世子作となつてるところから、世阿弥作と考えてほば間違いないとされている。

(2) 一方本では「勸請の巻 六道之沙汰」に清経入水の記事がほんの数行載っているのみであり、能において大きな役割を果たす清経の妻については触れられていない。八坂本では、遺髪を返されたということにショックを受けた清経が入水を決意した記事が、また南都本・中院本には、悲嘆にくれた妻が先立ち、遺髪を送ったことが裏目に出たことを後悔した清経が妻の後を追って自殺するという記事が載せ

られているが、いずれも簡単に触れられているに過ぎない。  
『源平盛衰記』での清経の逸話は『平家物語』のそれより遙かに詳しい。卷三十三「平家大宰府落並平氏宇佐宮の歌附清経海に入る事」において、清経と妻は二心なく深く契りを結んだ仲であること、西国落ちの際妻も同道させようとしたが周囲の反対にあつて叶わなかつたこと、形見に鬢の髪を残し常に便りをするを約したが、三年音沙汰がないことに怒つた妻が形見を返した事、月の美しい晩に海士の小舟で沖に漕ぎだし閑かに念仏して入水したことが載せられている。

(3) 主人公である平清経(？ー1183)は、小松内大臣平重盛の第三子として生まれ、左中将正四位下に至る。治承四年長兄維盛の下で副將軍として富士川の合戦へ従軍するが、翌年維盛の帰洛に伴い京に戻る。その後西国落ちとなり、箱崎の津から山鹿城に入るが、以前は小松家に仕えていたが、源氏へと寝返つた維義に追われ、世を果敢なみ柳ヶ浦にて戦わずして入海した。現在も、宇佐八幡宮に近い駅館川小松橋に清経供養塔がある。

(4) 以下、『清経』の詞章の抜粋は『謡曲集 上(日本古典文学大系)』岩波書店、一九七八、pp.250-256によつてゐる。

(5) さらに下掛かり宝生流では、  
われと身を投げ給ひぬれば、  
もし変らで同じ世に巡り逢ふと、  
頼め置きし言の葉までも、

今は早偽りなりける恨めしさよ  
と続く。妻の期待がより一層鮮明になる詞章である。

(6) 佐成謙太郎『謡曲大観』明治書院、一九三〇、p.850  
(7) 小山弘志他校注『謡曲集』(一)小学館、一九七三、p.205  
(8) 自由についてのカントの論述は、Kant I, *Kritik der reinen Vernunft*, PhB Bd.37a, Hamburg, 1990, II. Teil, II. Abt. II.

Buch, II. Hauptstück, IV. Abschn. での議論を主にもとじてきた。ここでは、純粹理性のアンチノミーという宇宙論的理念に関して理性の統制的原理を経験的に使用することについて述べられている。なお、『純粹理性批判』からの引用は慣例に従い、序文をローマ数字、初版をA、第二版をBとして、そのページ数を付記して本文中に記すが、本論文が関わるのは、初版と第二版に違いがない部分であるため第二版を使用した。

(ささき・かおり 筑波大学大学院哲学・思想研究科)